



旅行する子どもの 病気への対処

旅行中の発病・持病について知っておきたいこと，準備すべきこと



特集に
あたって

旅行する子どもと家族の安心のために

観光を目的とした旅行の形態は，団体旅行から個人・家族旅行へ，周遊型から滞在型に変化したといわれます。旅行する個人や家族の主体性が尊重され，遊びのみならず休息や癒し，実家への里帰り，さらには学びなど，さまざまな目的の旅行があります。そして，駅や空港，高速道路のサービスエリア，各地のテーマパークでは，多くの家族連れに出会います。旅行先は国内にとどまらず，海外へ出かける人も増えました。法務省入国管理局の統計では，2014(平成26)年の日本人出国者数は1,690万人に及びます。また海外への渡航目的は，観光だけでなく業務赴任，留学，研修など多岐にわたります。家族の海外滞在に帯同して，外国で暮らす子どもも増えています。

本特集は「旅行する子どもの病気への対処」です。たくさん子どもたちがさまざまな旅に出かける昨今では，持病や定期使用薬のある子どもが旅行する機会も増え，薬剤，時には医療機器の携行が必要な場合もあります。旅行中，食物アレルギーの注意や気管支喘息の発作が気になる家族も多いと思います。また，赤ちゃんは生後どのくらいから航空機に乗ることができるのか，冷所管理が必要な薬剤は何かといった素朴な質問もしばしば受けます。そのような相談にも答えられるような，広い領域をカバーできる特集企画をめざしま

した。

筆者は感染症や予防接種を専門分野とする小児科医であり，海外へ渡航する子どもたち，さらにはその家族の健康相談に積極的にかかわっています。その原点は，自ら家族を帯同して赴いたガーナでの2年間の滞在でした。海外での在留や休暇旅行を通じて，乳幼児を連れての旅にはいろいろな苦労がともなうことを，身をもって体験しました。30年の歳月を遡って，巻頭のカラーグラフでは，そのころのさまざまなシーンを紹介しました。カラーグラフのもう一人の執筆者，遠田耕平先生とは20数年来の友人です。WHO(世界保健機関)医務官としての20年に及ぶその経験に基づいて，「アジアの子どもたちの病気」を紹介してもらいました。特集企画原稿では，旅行の準備あるいは旅行中の急病に備えて，知っておきたいことや実践すべきことのなかで大切と思われる事項に関して，いろいろな職種の専門家に解説をお願いしました。

本特集が，少しでも読者の皆様のお役に立つことができれば，大変嬉しく思います。

川崎医科大学小児科教授
中野貴司 Nakano Takashi